第１回四日市市総合計画策定委員会　会議録

■日時：平成 30 年８月 28 日（火）14：00～16：20
■場所：四日市商工会議所　３階大会議室
■出席者：
林良嗣委員（委員長）、種橋潤治委員（副委員長）、甘利正晴委員、荒木栄里子委員、上野尚子委員、尾崎彰委員（代理出席）、岸村吉偉委員（代理出席）、杉浦礼子委員、田中幸司委員、野村愛一郎委員、前田明子委員、増沢陽子委員、水谷孝子委員、宮西マリア委員、森寺浩一委員、山下智香委員、山原裕美委員、渡邉勝幸委員、藤井信雄委員
■欠席者：
田端文音委員、水谷重信委員
■議事：
１．市長あいさつ
２．委嘱状および任命状の交付
３．委員長、副委員長の選出
４．各委員紹介
５．次期四日市総合計画の策定に向けて
（１）総合計画について
（２）今後のスケジュールについて
（３）現総合計画の検証について
（４）意見交換
〈将来の四日市の姿やまちづくりについて〉
６．その他

１．市長あいさつ
森 市 長　・皆さんにご意見をいただき策定していただく総合計画は、2020 年度から 10 年間の四日市市の展望・将来像を描き、それを実現するためのまちづくりのあり方を示すものである。
・市の施策や事業は、この総合計画に基づいて進められることから、本計画の指し示す方向性は非常に重要なものとなる。
・今後 10 年間は、自治体にとっては非常に厳しい環境になると思われる。全国的には人口減少が始まっているが、四日市市では人口が維持され、経済も悪い状況にはないと考えている。それ故に、四日市市が勝ち残っていくための重要な期間であり、また、リニア中央新幹線の開通などの大きなインパクトをまちづくりにどうつなげるか考える必要がある。
・31 万人元気都市四日市の良さ、特色を出していける攻めの総合計画をつくっていきたいと考えている。また、この委員会を中心に、市民の皆様や市議会などを巻き込んで策定に取り組みたい。

・策定期間は１年半程度ではあるが、熱心なご議論をお願いしたい。

２．委嘱状および任命状の交付

・市長から各委員へ交付

３．委員長、副委員長の選出

・林良嗣委員が委員長に選出される。

〈委員長就任のあいさつ〉

・私は四日市市出身であり、海洋少年団で活動していた。私が学生の時代には、３種競技（カッター、手旗信号、水泳）の全国大会で何度も優勝をしていた。そういったこともあり、四日市市にはとても強い思い入れがある。

・イギリスのリーズやドイツのドルトムントなどで研究をしていたが、研究者として各国・地域の厳しい時期や成長過程を見てきた。

・自治体を取り巻く環境も厳しい段階に入ることになるが、良い総合計画を策定するため、委員の皆様のご協力をお願いしたい。

・委員長により、種橋潤治委員が副委員長に指名される。

〈副委員長就任のあいさつ〉

・私も四日市市で生まれ育ち、大学卒業後は長い間関東に暮らしていた。四日市市を外から見ていたが、良いところや物足りない部分がよく見えた。

・10 年ほど前に四日市に戻り、これからも住み続けていくことになるので、四日市市をより良いまちにしていきたいと考えている。

・今後、人口減少が見込まれるが、商工業が発展し、市民が暮らしやすいまちになるよう、皆さんとともに議論をしていきたい。

４．各委員紹介

・事務局により各委員を紹介。

５．次期四日市総合計画の策定に向けて

（１）総合計画について

（２）今後のスケジュールについて

（３）現総合計画の検証について

・事務局により資料の説明。

・特に質問・意見はなし。

（４）意見交換　〈将来の四日市の姿やまちづくりについて〉

委　員　Ｆ　・何事も健康で元気にいることが基本であるが、健康というのは体と心がともに健やかでないといけない。

・運動の実施だけでなく、人と人との交わりから元気が生まれてくる。健康は食

事や運動を管理するだけでなく、「きょういく（今日行くところ）・きょうよう（今日用事がある）」といった人との交わりも重要である。また、教育と教養の充実も大切である。

・特に、男性高齢者が家から出てこないことは課題である。120 名で健康ボランティア活動を行っているが、参加者の 8 割は女性である。男性は現役引退後に閉じこもりがちになる。地域として活力を使えておらず、もったいないという印象がある。

・資料の構成と概要はわかったので、興味がある部分を中心に読み込んでいきたい。

委　員　T　・スポーツと文化の充実が、心の源、健康の源になると考えている。多岐にわたる文化を大人だけのものとするのではなく、子ども達に継承していくことも大切な役目である。四日市の文化を知って、子ども達がまちに誇りを持つことができればと考えている。

・日本の文化を学ぶことで日本人としての誇りにつながっていくと考えている。四日市の文化の学びについても、次期総合計画にしっかりと盛り込んでほしい。

・文化協会は 4500 人の会員がいる。意見交換の機会を設けて、意見を吸い上げてほしい。

委　員　A　・前回の総合計画策定に参画して、市のことがよくわかって、良かったと感じている。現行計画の評価について、数字として成果が見えるものは評価しやすいが、人権など内面的な施策・事業の成果は見えにくく、わかりにくいこともある。

・人権問題の解決には、人と人とのつながりが大切になる。市でせっかくいい取組をしていても、各分野・各部署での取組がつながっていないこともあるので、現行計画の成果がどうだったかということを話し合う機会を設けるなど、連携を重視していただきたい。

委　員　L　・全国的にバス利用者が減少し、運転手の成り手不足が課題となっている。四日市でも今年の春、利用者の減少により、四日市市から鈴鹿市をつなぐ路線を廃止した。

・一方で、高齢化社会の進展や高齢化に伴う免許返納の増加などにより、今後は車に乗らない市民が増えてくることが考えられる。バス交通の位置付けも変わりつつあり、対応を柔軟に考えていかなければならない。

・渋滞等による遅れがバス離れの要因となっている。通勤時間帯の渋滞解消がバス交通の定時性を高めることになるので、道路整備の充実をお願いしたい。

委　員　G　・四日市駅は、所管範囲内では名古屋駅に次いで２番目に乗降客数が多い。

・全体的に輸送客数は減少しているが、伊勢方面では定期利用者の増加がみられる。これは、60 歳以上の再雇用が進んでいることが原因と考えられる。

・道路環境が良くなると鉄道利用がさらに減ってしまうかもしれないが、近鉄四

日市駅周辺に生活を支える施設が集まり、賑わいや生活利便性の向上が図られると鉄道利用も増えるのではないかと期待する。

委　員　S　・地域イノベーションを専門に研究しているが、地域課題を発見し、一早く対応することで都市間競争に勝ち残っていくことができると考えている。

・四日市の教育に関しては、現場の先生がよく頑張っているものの、課題として不登校がなかなか減らない現状がある。子供も親も多様性が増しており、これまでよりも手厚い配慮が必要とされている。

・四日市出身の大学生を見ていると、郷土愛がとても強く四日市に誇りをもっていると感じる。給食や教材を通じて郷土愛を育む体制が整っており、学びの教材を活用して人づくりを上手く進められている。

・一方で、名古屋に負けているのは、そうした出身者を引き戻すための仕事づくりだと思う。愛着のあるまちで働くことができるまちづくりが求められる。

委　員　B　・東海・東南海地震は近いうちに必ず発生する。沿岸部、山間部のそれぞれが必要な対策を真剣に考えないと、多くの命が失われかねない。沿岸部の市民と山間部の市民との協力体制をどのようにつくるかが課題である。

・先日、三重県全体の防災研修に参加したが、県南勢部の受講者の危機感と当事者意識は非常に高く、北勢に行くにつれて防災意識が低くなっていることを危惧している。

・県南部が被災した場合、四日市市としてどのように受け入れていくのか検討しなければならない。より広域的な点では、浜岡原発で事故が起きた場合、計画では静岡県袋井市（人口 7.1 万人）の市民の避難を三重県で受け入れることになっている。このことについて、現状では具体的な検討がなされていないが、四日市市の役割を含めて考えていかなければならない。

委　員　H　・私も 10 年前に総合計画策定に関わり、それからの時の動きが速いと感じている。近鉄四日市周辺には約 10 種類の商店街振興組合があるが、それらの集合体である諏訪栄町地区街づくり協議会を代表して参加させていただいている。

・昨年、東芝の売却問題が持ち上がった時、マスメディアから多くの取材を受けたが、四日市市は東芝一つの企業城下町でもなく、昔からのコンビナート系企業や自動車産業などが集積し、厚みと多様性のある産業構造にあることから、「心配ではあるけど、危機的な状況にはない。」と回答していた。

・四日市の中心市街地は、飲食中心ではあるが活況を呈しており、周辺市町からも遊びに来ている人が多い。

・現行計画は、平成の時代のなかでつくられ推進されてきたが、次期総合計画は元号も変わり、新しい空気感、時代に向けてつくられることになるだろう。次の 10 年で様々な変化があるため、新しい時代のイメージをどのように具体化するかが、次期総合計画をより良いものにするうえで重要だと考えている。

委　員　R　・政策評価検証委員会の委員をさせていただいた時は、計画期間が３年間の推進計画の評価だったが、今回策定する総合計画は計画期間が 10 年ということで、

かなり先の長期なので見通しにくいと感じる。そのため、10 年後の人口構成と変化の流れを見据えながら、必要な施策を打ち出していくべきであり、様々な分野を横につなぐことで解決に向けたアイディアが生まれてくるのではないかと考えている。

・企業で働く従業員が抱える主な課題としては、子育てと介護である。これらに直面すると仕事から離れることを強いられてしまい、実際に、子育てや介護を理由とした離職を沢山見てきている。

・託児所はもとより子供の夏休み中の支援が特に必要と思われる。介護でもデイサービスの送迎が負担になっているが、そういった問題を企業だけでなく、子育てや介護施設、行政などが連携し、施策や取組を生みだし、膨らませることが望ましい。

・各種の施設をつくるだけでなく、四日市の施設で働きたいと思う人が増え、確保や定着がうまくいくと住みやすく安全安心なまちづくりが進む。そうなれば家を建てて四日市にずっと住みたいといった流れが生まれていくと思う。

委　員　C　・専門は環境法であり、環境保全審議会の委員を務めている。地球温暖化が課題となる中で、太陽光など再生可能エネルギーを自治体がどう活用していくかが全国的な課題となっているが、様々な効果を生み出す反面、別の環境問題を引き起こす可能性があり、自治体のマネジメント能力が問われている。

・本日、参考資料として配布された、都市計画マスタープランの土地利用方針によると、四日市市はかなり広い自然地域を有している。こうした自然資源を活用しつつ、都市としてはコンパクトにして環境への負荷を抑えるということを車の両輪として進めることが大切である。

委　員　I　・子育て支援の団体として、親子に対する成長の支援活動を行っており、市内の子育てに関係する情報はかなり入ってきている。市の施策に「子育て」という分野はあるが「子供」が前面に出てこない。子供たちには自ら成長する力が備わっていると思うが、子供代表がこの場にいないことが残念に感じる。

・北欧などではかなり前から、子どもが学校運営や能動的な学習に主体的に関わっている。アクティブラーニングのような能動的な教育スタイルが特徴的で、子供が発表することで自立力が備わってくると思う。日本でもそうなっていけばいいと考えている。

・親による子供の虐待が年々増えており、生まれてすぐに亡くなる子供が多い。自殺も総数は減少しているが、青少年の自殺数が増えている。少子化の時代においては、子どもの権利条約の精神にのっとって、親が育てられない子供は社会が育てるといった発想に立ち、里親や特別養子縁組に力を入れるなど社会全体で子どもを育てるという環境づくり、雰囲気の醸成を進めることが重要である。

委　員　Q　・25 年前に来日した時、ブラジルをはじめ南米から来た外国人による交通事故や交通違反が多かったことから、交通安全教育指導員になった。

・暮らしやすいまちだと感じる一方で、交通安全の面からすると、特に生活道路が狭いうえ、管理が不十分で白線の消えている箇所や凸凹がある道が多い。そういったところは、高齢者にとっては手押し車を使って歩くことも難しく、暮らすのも大変だと思う。

・昔と比べて横断歩道で車が止まってくれなくなった。インフラの状態が悪くなると人のマナーも消えていくため、道路環境の維持管理に力を入れるべき。

・ブラジルでは年間 3～5 万人が交通事故で亡くなっている。比較すると日本の状況のほうが良いが、交通教育や啓発が大事になってくる。

・多文化共生の視点でみると、最近では、南米出身だけでなくアジアの人々が多くなっている。多くの外国人が四日市市に来て、なじめるようにすることは、活気の創出や犯罪の抑止など地域社会にとってもプラスになることが多い。外国人も四日市のまちづくりにプラスになるので、社会教育が必要と感じている。

委　員　D　・四日市に生まれ育ち、四日市をこよなく愛している。企業が成り立つのも人があってこそ。モノづくりはコトづくり・ヒトづくりと考えている。経営を 10 年以上続けることは難しい中で、四日市は安定経営が多く長続きしている企業が多い。その反面、グローバル化を目指す企業は少ない。

・今後、AI や IoT を取り入れるのに研鑽、自助努力しているが、経営にもものづくりにも、人が携わることは不可欠である。

・市内に工業高校が２校あるが、そこで学んだ学生の多くが地元の大手企業で働けるようになるとよいのでは。また、私立大学の工業系のキャンパスを誘致するなど人材確保に向けた取組が望まれる。

・四日市市として厳しい時代になるが、人口減少に立ち向かうためにも、若い世代に魅力あるまちづくりを進め、まちの魅力を全国に発信しながら、市内の人口やものづくり人材を拡大させていって欲しい。

委　員　O　・いつも高齢者福祉の分野で仕事をしているので様々な分野の方からお話を聞くことは視野が広がりうれしいことである。各委員の提言は、巡り巡って全て高齢者の暮らしにつながってくる。それぞれのアイデアが充実してくれば、高齢者は幸せに亡くなることができると思うし、そのための総合計画づくりに協力していきたい。

・７年前まで市役所に勤務していたが、職員時代に市独自の施策として、在宅介護支援センター、相談窓口を小学校区単位で設置してきた。今は日々現場で仕事をする中で、市職員時代に取り組んだ施策の良し悪しが分かる立場となったので、今後意見を述べて行きたい。

・人材の確保は福祉施設としても大きな課題となっている。施設でも老老介護の状態が当たり前になっているが、働くことは介護予防の第一歩である。「70 歳からが働き時」を合言葉に、介護予防と就労支援を進めていくべきである。

委　員　J　・ブルーベリー狩りのための観光農園を営んでいるが、農業を取り巻く環境は非

常に厳しい。観光農園をはじめたきっかけは、天候の不安定・人材不足・獣害・最近の酷暑が理由であり、同様に施設型農業へ移行する人が増えている。

・高齢により農業の第一線は引いたが、70 歳を超えてもパート程度で働きたいと考える人は多い。知識や経験豊富であり、収穫期に手伝いに来てもらい助かっているが、募集は口コミに頼らざるを得ない現状にある。高齢者の新しい活躍の仕方として、人材マッチングに力を入れてもらうとよい。主な働き手として、シニアの農業経験者の人材の確保は大きな課題である。

・外国人研修生を受け入れているが、３年もしくは５年という期間の長さ、繁忙期と閑散期のある状況のなかで、小規模な農家一軒では負担が重く、受け入れが難しい。

・小規模な農家にとって使いやすい農機具の普及が望まれる。先日、商工農水部が開催した農商工連携のための会合に参加したが、農機の開発や改良について企業との連携の可能性を感じた。

・四日市農芸高校卒業生のうち、農家の跡継ぎ以外はほとんど農業関連の仕事に就かないと聞いた。そうした現状がもったいないと感じる。

・農業の二極化がこれからの 10 年でさらに進んでいく中、総合計画の策定と関連して、10 年後の農業についても考えていく必要があると考えている。

委　員　P　・地元の良さに気付いていない四日市出身の方が多い。私は特に、観光の拠点としての広域的な利便性を評価している。

・スポーツに関しては、2020 年の東京オリンピックや 2021 年のとこわか国体が開催される。市内でスポーツ施設の整備が進んでおり、国体を機に全国から人が集まるが、交通の利便性が見合っていないと感じる。10 年後を見据えると、全国規模のスポーツ大会を誘致して、子供にスポーツを見せることができるだけの環境・インフラ整備が必要と考えている。

・四日市は健康寿命が全国トップクラスだったと思うが、人生 100 年時代においては市民が健康に暮らせることが大切。総合型地域スポーツクラブが市内に 6 か所しかないがそれでよいのか。市民目線に立って行政の支援が必要ではないか。

・各分野との連携を強めながら、市の魅力の発信や子どもの見守りを含めた育ちの支援などを行うことが重要である。

・元気に暮らし続けられるまちづくりにとって、健康寿命の延伸は重要なテーマあり、スポーツもその一翼を担わなければならない。市民が無趣味であったり、健康づくりをしない人であったりということがないように啓発・指導することが理想である。例えば、企業は、55 歳を超えた職員に対し、スポーツの実施を課題に与えるくらいでもよいのでは。スポーツを通じて仲間もでき、元気で自立的な生活を送ることにつながる。

委　員　E　・本日の各委員のご意見をうかがい、市の職員が次回以降の策定委員会に向けて、今までにない計画案をつくれるかということが課題だろう。

・一時期はリスクを取らずに効率的な行財政運営をすることが評価されていたが、これまでのモノサシとは異なり、効率化を求めるだけでは評価されない。リスクをとりながら金を稼げるまちづくりを進めなければならない。簡単な道のりではないが、市民が驚くような計画を職員が知恵を絞って練り上げていきたい。

・子育て支援から高齢者介護までの多世代、雇用の確保から中心市街地の活性化までの他業種、これらを網羅しつつ、このようなまちづくりを進めると胸を張って言えるように、計画策定のプロセスはオープンにする。その過程で市民の意識も変わり、市の良い所をＰＲしていくことができる。

・計画策定に関わった職員が退職し、70～80 歳になった時に、良かったと思える計画を策定していきたい。

・委員の皆様には、ある時は喧々諤々、ある時はともに市民や企業に発信していくパートナーとして、委員会にご協力いただきたい。

委　員　Ｋ　・四日市市の経済の状況について、企業活動は活発で、一部の大企業は研究開発施設を四日市に集約させていている。四日市港についてもコンテナ貨物を中心に、取扱量が過去最高まで増加している。

・四日市市の強みを生かしつつ、時代を先取りした新しい挑戦もしていかなければならない。そのことが成長につながるし、これまでも四日市にはそういったチャレンジの歴史がある。

・一方で、人材確保、人材育成は地域として考えなければならない課題である。地域に必要な人材を確保していくためにも、地域の教育水準の向上が望まれるため、教育機関の誘致・支援を検討すべきである。

・企業の事業承継が課題になっており、対策を講じなければ廃業してしまう。事業承継や創業などの支援を並行して行うほか、産業の活性化につながる施策の展開が求められる。

・四日市市を取り巻くインフラ整備は、これからどんどん進んでいく。新名神高速道路の開通を控え、東海環状自動車道や北勢バイパスについても順次整備されていく。リニア中央新幹線の開通により、品川から四日市までが行きやすくなる。これらをどう活用するかが課題であり、特徴づくりを急ぐ必要がある。

・ＩＣＴ・ＡＩなどの情報化社会の進展を、地域にどう取り込んでいくか検討が必要である。

・少子高齢化社会に対して、地域としては歯止めをかけるようなことも考えなければならない。

・グローバル化の進展に伴い、企業の海外進出をどう支援していくか検討が必要である。国際化という点では、外国人にどのように働いてもらえるまちにしていくかも課題であり、相互にメリットのある環境を整える必要がある。

・市としては、シティプロモーションを積極的に展開しているが、外から見ると四日市に対する認識が薄いこと、市外の高齢の人には公害のまちをイメージさ

れる方も多く、まちの情報の更新が止まっている印象を受ける。今の四日市を知ってもらわないと住みたい気持ちにならない。まず四日市を訪れ、次に定住につながる取組が必要と考える。

委　員　長　・皆さんのご意見は素晴らしく、良い総合計画ができるのではないかと確信している。

・私としては、四日市市で 20 年来の研究テーマである「スマートシュリンク」に取り組んでいきたい。これは、豊かな生活を維持しながらインフラや環境を維持するコストの抑制を目指すものである。

・ローマクラブの会長のワイツゼッカー氏が提唱した“ファクター４”という、消費する資源を半分にしてＧＤＰを２倍にするといった概念に加え、ＧＤＰを幸福度などに置き換え、‘足るを知る’社会をつくることも重要である。

・シュリンクの意味は縮小するとか縮むといった意味だが、決して悪いことではなく、いかにスマートにシュリンクさせるかということが重要である。それを都市に置き換えるとコンパクトシティなどと表現されるが、質の高いストックを維持しつつ、郊外に安くて環境のいい住宅地が供給されることがないようにコントロールし、市民一人一人の総幸福度を最大化することが課題である。

・現在取り組んでいるタイのプロジェクトでは、それぞれの市民の生活シーンを並べて、その時間断面を考慮したうえで「交通はどうあるべきか」ということを考え、生活設計に合わせたインフラ整備をするという、新しい考え方に基づく試みを進めている。タイでさえ人口減少が 10 年後に始まる状況下の中で、交通をインフラから考える時代はもう古い。生活設計に交通を合わせる形で、逆算して組み立てていかなければならない。

・日本環境共生学会の 20 周年の大会を四日市市で開催するのでお時間がある方はぜひ参加していただきたい。

・本日の委員会の内容を取りまとめ、次回以降も皆さんと一緒に策定作業に取り組んでいきたい。

３　その他

・次回委員会を 12/18(火)13：30～15：30 で開催。

・11/25(日)午後、総合会館においてシンポジウムを開催。

以上